「批判的思考力」を高める社会科授業
～「個」を生かす「しかけ」をとおして～

西川 恭矢

唐木（2017）は社会科の目標でもある「公民的資質の育成」のためには，「児童生徒の実態や地域の実情を反映させて，学習指導要領や解説からの引用ではなく自らの言葉で公民的資質を定義し，それを授業に生かすという発想をもつ」[1] 必要があると述べている。公民的資質について定義する際に重要になってくることは，子どもたちが活躍する未来がどのような社会であるかを考察することである。デイビッド・エプスタイン（2020）は社会が「世界の複雑さは増しており，世界がテクノロジーで相互につながって，さらに大きくなり，個人はごく小さな部分しか見えない状況になっている」とし，そのような時代に必要な人材を「幅広く始めて，成長する中でさまざまな経験をし，多様な視点を持つ『レンジ（幅）』のある人たちである」[2] としている。エコチェンバー化という言葉が示すとおり，自分とは異なる意見を排除し，閉鎖的なコミュニティが形成されつつある現代社会において，「多様な視点をもとに対話によって合意形成を図れる力」を育成していくことこそが，これからの社会科の使命であると考える。長岡（1985）は「社会科は，考える社会科をめざすべきである」とし，その過程で「みんなのことを案じる」力が育成されると述べている。[3] 社会科は，自分たちが暮らす地域社会の視点から他者について考えることができる教科である。考え方の違う他者との対話をとおして，一人一人の子どもたちの社会に対する見方・考え方が広がる実践を試みた。なお，本実践は，本校が定めた活用に関する指標にある認知的方略，批判的思考（見方を変えて物事をとらえなおす）の育成をめざしたものである。

キーワード：座席表を用いた子ども理解，カリキュラム・デザイン，地域社会の教材化，合意形成に至る対話

１．研究内容・方法

１．１．座席表を用いた子ども理解

子どもたちが考えの違う他者との対話をとおして，自身の考えを批判的に再考していくためには，他者の考えを聞く必然性のある学びが発揮される場をつくりだしていくことが求められる。長岡（1985）は「考えあう授業には，みんなで考えあう共通の問題を必要とする。この共通の問題は，一人一人のもつ問題をもとに成立するのである。～中略～ 共通問題は教師が言ったら，すぐ成立するものではない。共通の問題が成立するのは，それぞれの子どもが，問題を自己のなかにはっきりと位置付けたときである。」[4] と述べている。子どもたちがお互いの見方・考えを広げ，合意形成に至る話し合いを展開するためには，話し合いのテーマ（学習問題）に対して切実性をもっている必要がある。しかし，このような子どもにとって「切実性のある問い」は，教師からの一方的な提示では成立させることはできない。星野（1995）は，「座席表と授業案の一体化」によって，「子どもと教材の接点」をみつけ，一人一人の子どもたちが学びたいことに迫る必要性を提唱している。[5]

本実践において，座席表を用いて一人一人の子どもの学びに迫り，それぞれの個性が生かされる話し合い活動の場を設定することが，社会的事象に対する自分自身の見方を変えて物事をとらえなおすための「しかけ」となり得ると考える。

１．２．教科横断のカリキュラム・デザインの工夫

人間の本来的な学びには時間がかかるものである。ましてや，「それぞれの子どもが，問題を自己のなかにはっきりと位置付ける」ためには，学習対象と十分かかわらせる必要がある。このことについて，奈須（2021）は「2017 年版学習指導要領の理念である社会に開かれた教育課程や資質･能力を基盤とした学力論，主体的・対話的で深い学びの実現に向けては，less is more（少なく教えて豊かに学ぶ）を原理とし，多様な人々との出会いや豊かな活動・体験を足場に，十分な時間をかけじっくりと学び深めていくことが望まれる。」[6] と述べている。

本実践では，社会科の教育内容を他教科・領域の教育内容と関連付けられるようカリキュラム・デザインの工夫を行う。子どもたちが「十分な時間をかけじっくりと学び深めていくこと」ができる学習環境を設定することで，他者との対話をとおして，社会的事象をとらえなおす学びへの素地が整っていくと考える。

１．３ 地域社会の教材化

上田(1989)は，地域の素材を教材化する意義について「地域の教材が貴重なはたらきをするということは，ただ手近にあって便利で親しみやすいということのためだけではない。一人一人の子が，自分自身の立地条件をだいじにすることができるという点が重大なのである。子どもはことがらを自分に引き付けて考えることができる。」[7] と述べている。子どもたちが自分らしい考えを出し合い，自身の考えを広げ，合意形成を図る対話を実現するためには，学習問題が切実性を伴ったものになっていることが重要であることは先にも述べたとおりである。地域社会を教材化することで学習内容を「自分に引き付けて考える」姿を期待する。

また，藤井(2010)は，子どもたちが協働的に学ぶためには，「体験した出来事を時間的な順序に従って，自分は足をどこに運び，手で何をやり，目で何を見，耳で何を聞き，肌で何を感じたのかのなどについて，可能な限り具体的な知覚的な言葉で，心の動きも踏まえながら語れるように支援すること」[8] が必要であると述べている。個性に溢れたその子らしい考えを引き出すための「しかけ」として，本実践では，地域のメリヤス工場を教材化し，子どもたちにとってつながりの深い地域で働く人々との出会いの場を設定する。

１．４ 研究方法

仮説の検証授業を行い「多様な視点をもとに対話によって合意形成を図る姿」を授業記録，子どもの表現物（ノート記述等），行動観察から捉えることで，研究内容①座席表を用いた子ども理解②教科横断のカリキュラム・デザインの工夫③地域社会の教材化の効果を検証し，批判的思考力（見方を変えて物事をとらえなおす力）を育成するために必要な学習の要件を明らかにする。

２　授業の実際

≪単元について≫

単元名　「わたしたちのくらしと工業生産―吊り編み機を使った製品づくり―」
対象児童　和歌山大学教育学部附属小学校５年Ａ組（28 名）
単元計画　社会科（16 時間）

第一次　自分にとって身近な工業製品を調査しよう。
・イメージマップ等を活用し，自分自身の生活を支える工業製品に興味をもつ。①
・自分が興味をもった工業製品の製造過程を調査し，全体で共有する。②③

第二次　身近な工業製品について，詳しく調査しよう。
・クラス全体で調査したい工業製品を選択し，製造過程についてより詳細に調査する。④⑤
・調査活動をとおしてでてきた疑問について，全体で話し合う。⑥

> ◎ 学習問題Ⅰ
> 服作りはこれからも機械化を進めていくべきか？

第三次　大工場と中小工場を比較しよう。
・大企業の製品（Ｔシャツ）と和歌山の企業の製品（Ｔシャツ）を比較し，値段がちがう理由について調査する。⑦⑧⑨
・和歌山の企業でどのように服が作られているか実際に見学をとおして理解を深める。⑩⑪

第四次　これからの工業生産について考えをもとう。
・工場見学を通して気付いたこと等を出し合い，みんなで考えたい学習問題を設定する。⑫

> ◎ 学習問題Ⅱ
> Ｗさんの会社はこれからも吊り編み機を使った製品づくりを進めていくべきなのか？

・大企業や中小企業の役割や工業生産の在り方について多角的な視点から話し合う。⑬⑭

第五次　単元をとおしての学びを振り返ろう。
・学習をとおして考えが深まったことを中心に，報告書を作成し，お互いの考えを伝え合う。⑮⑯

２．１　座席表を用いた子ども理解について

本実践では，一人一人の思いに迫るため，全時間において授業における子どもの発言や振り返りをもとに授業者の見取りやそれぞれの子どもに対する期待や願いを記入した。教材のねらいだけでなく，子どもたちの思いも加味することで，子どもたちが学びたい学習問題を設定することができると考えた（図１）。

図１　子どもに対する願い等を記入した座席表

＊A児の座席表記録
　大量生産によって自分たちの身近な商品が安くなっていることから，安いものを手にするために今後も機械を進めていく必要があるという考えをもっている。「Tシャツでも自分だったら，○○（企業名）のものを買うし，実際に今日も○○の服を着ている」という発言あり。A児の発言をきっかけに全体の学習を値段と品質に焦点化していきたい。（Wさん（和歌山で工場を経営する方）との出会いの必然性になるか？）

上記は，第6時「服作りは，これからも機械化を進めていくべきか？」について話し合った後の座席表記録である。A児は自分のお気に入りの，○○（企業名）の服が安い値段で売られている理由について理解し，自分の好きな商品が安いという理由から，工業の機械化による大量生産に肯定的な考えをもっていた。そこで次時では，A児が自分の思いを話す活動からスタートした。A児による「自分の好きな服を安い値段で買えるってすごくいいことやん？逆にこれで機械を使って大量生産はしなくてもいいですよって考えには誰もならないと思う･･･」という発言は多くの子どもたちの共感を得た。ここで，品質にこだわり大企業の製品よりも3倍近い値段でTシャツを販売している和歌山の企業があることを伝えた。品質よりも値段の安さに着目していた子どもたちからは，「どうしてWさんが品質にこだわって服作りをしているのかが聞きたい」という声が聞かれた(図2)。

図２　実際に手に触れ，Ｔシャツを比較する子ども

和歌山で工場を経営するWさんの話を聞いてみたいという声が子どもたちから挙がった理由として，学習対象に対して「自分の言葉」で語るA児の姿があったからということが挙げられるのではないだろうか。子どもたちの内側から語られたその子らしい発言には，クラス全体の学びを能動的にする力がある。クラス全体の学びを活性化する「その子らしい」発言を引き出すために，座席表を用いた子ども理解は有用であったと考える。

単元の学習が進む中で，Wさんの品質に対する思いに共感する子どもと，あくまで消費者の視点に立って値段にこだわる子どもの中で考え方の違いが明らかになった。B児は工場見学から一貫してWさんの製品づくりを共感的に捉えている。

＊B児の座席表記録（10 月 20 日）
　Wさんの製品は 10 年間使えるという情報から，決して高いものではないという考えをもつに至っている。工場内で見られた様々な工夫についても感動している様子で，Wさんの工業に対する思いを実感することができている。10 年間使える服であっても現実社会では爆発的な人気を誇っていない矛盾に迫らせる過程で，様々な工業のあり方について考えを深めさせたい。

＊B児の座席表記録（10 月 24 日）
　見学を終えたときは，Wさんの魅力がたくさんあると思っていたが，みんなで話し合っていくうちに，いろいろな視点から考えると簡単には魅力とは言えないということに気付いたとのこと。（多角的な視点から判断する力が育まれてきているか？）「それでもWさんは魅力的でかっこいいと思う」との記述もあり。何がWさんのカッコよさにつながっているか考えを深めさせたい。

＊B児の座席表記録（10 月 26 日）
　量よりも質にこだわる決断をしたWさんは，人口が少なくなってきたこれからの時代にあった工業をしていると考えている。また，１９６０年代に使わなくなった吊り編み機がたくさん余っていたことも質にこだわるきっかけとなったと考えているようである。なぜ，多くの人が簡単に吊り編み機を手放したかについても再度考えさせ，高度経済成長期の日本の様子をとらえさせたい。

それに対し，C児はWさんがこだわる「品質の良さ」は自分たちにはわかりにくいという理由からWさんの工業製品づくりを否定的に捉えているようであった。

＊C児の座席表記録（10 月 26 日）
　たとえ品質が悪くとも自分なら絶対に大量生産の機械の導入を進めるとのこと。「吊り編み機が多くの工場で手放されたのは，吊り編み機にそれほどの価値がないからだと思う。」との記述もあり。シンカー編み機にはたくさんのメリットがあり，デメリットは品質が少し落ちることだけだと考えている。「自分たちはその品質の悪い服も普通に着れているから問題がないのでは？」と思っている。自分の考えにこだわる発言に期待する。

（＊C児は食料生産について学習した際も，「外国産が悪いみたいになってるけどほんまにそうなん？家で調べてきたらぼくの好きなもんほとんど外国産で作られた。みんな国産がいいって言ってるけど国産ばっかりにしたら精進料理になるで。」と発言している。「自分」という視点から学習対象を捉えることができるため，C児の発言をきっかけに話し合いが深まる場面が数多くある。）

2人の意見をもとに「Wさんは，今後も吊り編み機を使い続けていくべきか？」という学習問題を設定した。子どもたちは，このような二項対立（品質か安さか）になりやすい問いにもさまざまな視点からアプローチすることができる。環境問題に人一倍興味をもつD児の振り返りには「大量生産ができることで安くなるけど，毎年多くの服が捨てられていることにも目を向ける必要性があると思う」という言葉が見られた。また，人との出会いによって自身の生き方を見つめ直すことができるE児は，「Wさんは着る人が幸せになる服づくりをめざしているといっていた。そんなことを思って服を作ってくれているなら値段とかじゃない気がする」と発言した。限られた時間の中で，子どもたちが自分らしい意見を表出し，考えを深めていくことができるようにするためには，「その子らしい思い」をもとに授業づくりを進めていく必要がある。図3は，座席表カルテをもとに作成した細案である。もちろん，この通りに授業が進まないことも多いが，それでも授業者はその子らしい発言を把握し，然るべきタイミングでその子どもが活躍できる場を設定できるよう準備しておきたい。自分の発言や考えが周りの仲間の学びを深めるきっかけになったことを実感することで，他者の意見を受け入れ自身の考えを批判的に考察できるようになっていくと考える。

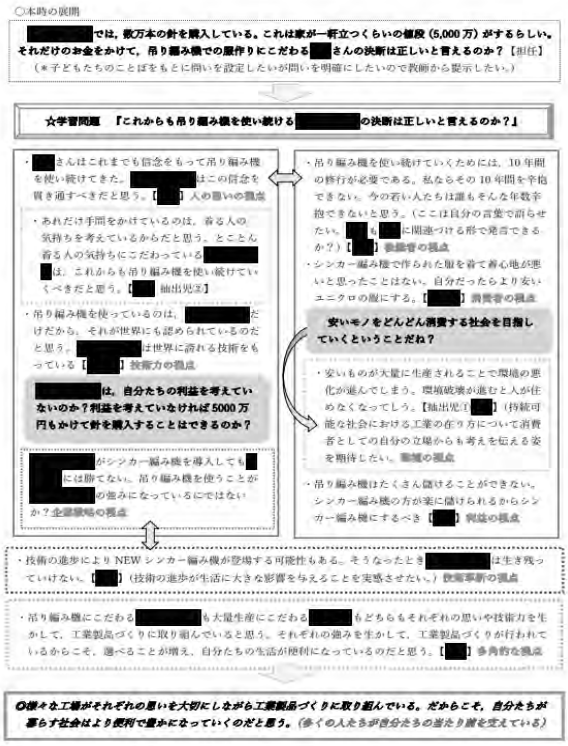

図3　座席表への記録をもとに作成した細案

2．2．カリキュラム・デザインの工夫について

子どもたちの自発的な学びを発揮させるためには，教師による意図的な環境設定が必要であると考える。本実践では，「他教科とのカリキュラム・デザインの工夫」を通して，子どもたちが工業生産についてさまざまな視点から十分に考えられる時間を確保した。

国語科では，本来なら 12 月に実施する『伝記を読み，自己の生き方を考える』学習を，11 月に取り扱った。本単元では指導目標を「子どもたちが偉人について書かれた伝記を読む活動をとおして，自分の生き方についてまとめる」と設定した。第１時で「すごいと思える人」を出し合った際には，「リンカーン」や「アインシュタイン」と共に「K さん（1 学期にかかわっていただいた米農家の方）」「M さん（2 学期にかかわっていただいた漁師の方）」「W さん」の名前が挙がった。また，F 児の振り返りには，自分が選んだライト兄弟の生き方とWさんの生き方を関連付ける記述が見られた。

> 僕は，ライト兄弟の伝記を読んでウィルバーとオービルがいて，子供の頃から機械をいじるのが好きで２人は荷物車を作ったりしていた。機械が好きなのはぼくと同じ。　～中略～　ライト兄弟は友達と一緒に飛行機のようなものを図にかいて，実際に作って空を飛べるかを試していた。時には問題が起きたり壊れたりすることもいっぱいあったみたい。それからその実験を続けてようやく乗れるようになった。これは自分の夢もみんなの夢も叶えて，生活などに役に立っていることだと思う。僕もこんなふうになれたら良いなぁと思いました。これを見るとやっぱりすごい人は諦めていない。やっぱり諦めないことは大事。この前見学にいったときWさんも着心地がいい服にしたいと言っていた。Wさんも自分の夢もみんなの夢もかなえようとしているのかな？何かを作る人って共通しているところがあるのかも。
> ＊F児の振り返り

F 児は，全体の場では自分の思いを発表することが少ない子どもであるが，低学年の頃に参加した科学教室がきっかけで，モノづくりに対して強い興味をもっているようである。あきらめずに取り組むことでできた製品が自分やみんなの夢を叶え，生活などに役に立っていることへの気付きは，工業単元でめざす「工業と自分とのつながり」を実感する姿であると言える。

また，道徳科では「節度，節制」をテーマに，欲求に流されて生活する主人公の姿について話し合う活動を設定した。ここでは，「流行のジーンズを買ってもらいたい」という主人公の気持ちを共感的に捉え，話し合いが展開された。消費者としての自身の欲求を満た

すことだけを考えることの危うさに気付いたＧ児は，周りの動きに動じず，自分が信じたモノづくりを続けたWさんの思いに対して理解が深まっている様子が見受けられた。

> 私も流行りのゲームをやりはじめる前は，みんなそのことを私の前で話していて仲間外れに思えて，そのゲームをダウンロードしたから，マユミさん（物語の登場人物）の気持ちも分かるけど，やっぱり流行に流されることで自分の好きな物が何か分からなくなって自分の個性を失ってしまうかもしれないという気持ちがあります。　～中略～　２時間目にWさんが吊り編み機を使うのを周りに時代遅れって言われたと言っていたけど，それもこの授業とすごく似ていると思う。Wさんは，周りに流されず自分の個性を出したいと思っていたかもしれません。今度，Wさんにこのことを聞いてみたいです。＊Ｇ児の振り返り

また，本実践では，自分たちの学びの流れを振り返りながら，多角的な視点から工業について考えを深めていけるよう学習環境の整備にも努めた。具体的には工業に関連する新聞記事（高齢者雇用問題・環境問題・人手不足・中小企業の経営難・持続可能な工業のための消費者の在り方）や，学習の流れをまとめた模造紙を教室内に掲示した。子どもたちは，それらを活用し，学びの過程を整理する姿が見られた（図４・図５）。

図４　関連する記事を読み，議論する子ども

図５　学びの過程をもとに，考えを伝え合う子ども

２．３．　地域社会の教材化について

本実践では，和歌山市の地場産業であるメリヤス産業を教材化することで，「我が国の工業の概要と工業にかかわる人々の工夫や努力を理解し，これからの工業の発展を多角的に捉え，問題の解決に向かうことができる。」という単元の目標に迫れるようにした。

和歌山市で長年，メリヤス工場を営むWさんは「身につけて心が豊かになる衣服を」をテーマに品質にこだわって製品づくりを行ってきた。高度経済成長期，質より量の時代を迎えた日本にあって多くのメリヤス工場が最新のシンカー編み機を導入し，大量生産に踏み切る中「吊り編みの風合いを次の世代に伝えたい。」「まだ誰も見たことがないわくわくするものをつくり出したい。」という思いから，あえて吊り編み機の製品づくりにこだわり続けるWさんの思いや生き方に触れることで，工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉え，工業に対する理解を深めていくことができると考えた。

Wさんが作ったＴシャツに触れ，品質の良さや値段の高さに驚いた子どもたちからは，「これだけ値段が高いということは，作り方に秘密があると思う」「すごく触り心地が良い服がどのようにして作られているか実際に（製造過程を）見てみたい」という声が挙がった。自分たちがイメージする衣服と品質も値段も大きく違う商品が和歌山にある工場で作られていることに驚いた様子の子どもたちは，Wさんとの出会いを楽しみにしているようであった。

実際の工場見学でも熱心に学習に取り組む子どもたちの姿が数多く見られた（図６・図７）。単元のスタート時から，「機械で作ったものには温もりがない」と考えていたH児の振り返りには「Wさんは，着心地の良い服を着てほしいという思いを実現するために機械を使っていることがわかった。今回の見学を通して，自分の考えが大きく変わった。」との記述が見られた。工場見学を通してWさんの思いを実際に聞くことで，批判的思考力を発揮し，自身の見方を変えて物事をとらえなおすことができた姿であるといえる。また，Ｉ児は工場見学後から「これだけすごいWさんの仕事がみんなに知られていないことが悔しい。」という思いを何度も口にするようになった。自分たちとつながりの深い地域で懸命に物事に取り組む人との出会いは，社会的事象に対する理解を深めるだけでなく，郷土に対する思いを豊かにするきっかけにもなり得ると考える。

工場内で完成した製品に貼られたシールに着目したＪ児は「作った製品はここで完成ではなく，どこかの工場へ出荷している。だからやっぱり大企業を支えているのは，中小工場の働きなんやで。こうやって関連して商品ができているから大企業だけがすごいみたいな考え方ってやっぱり違う気がする。」といった思いを口にしていた。Ｊ児は「自分にとって身近な

工業製品」として，自動車を挙げその製造過程を丁寧に調査してきた。Ｊ児が口にした「大企業だけがすごいみたいな考え方ってやっぱり違う気がする」という言葉は，工業の学習をする以前に「自動車は大企業だけの働きによって作られている」とイメージをもっていた自身に向けて発せられた言葉であろう。Ｊ児は自身の調査活動で得た知識を実感の伴った生きた知識へと昇華させることができた。その後の話し合いでもＪ児は中小工場の役割について言及する場面が増えていった

Ｋ児は，Ｗさんとの出会いをとおして，自身のもつ「伝統観」を変容させている。以下にＫ児の見学後の振り返りを示す。

> ぼくが今回の見学を通して一番感じたことは，伝統を守ることの大切さだ。　～中略～　何年経った今も，そしてこれからもＷさんは新しい機械を購入しないと言っていた。理由を聞いてみると「先代が言ったようにこの機械にしかできないことがたくさんある。それをこわすのはもったいない。この機械の良さを商品に活かしたい」（かっけー！）伝統を守るってこういう事なんだと気付かされた。これは機械に限らずいろんなことにも言える。昔からある漁法や伝統的な祭り，個々の良さが昔から受け継がれていると思う。でも伝統ばかり気にしてたらそれ以上の成長はないから，伝統を守りつつ新しい時代を切り開いていきたい。

Ｋ児はＷさんの思いに触れることで，Ｗさんの工場が大切にしてきたことを実感し，その生き方を「かっけー！」という言葉で表現している。常に最新の機械を導入し，技術革新をめざす大企業と昔からの機械を使い続けるＷさんの工場は大切にしている価値観がまったく違うように見えるが，「伝統を守るってこういう事なんだと気付かされた。」「でも伝統ばかり気にしてたらそれ以上の成長はないから，伝統を守りつつ新しい時代を切り開いていきたい。」という記述からは，どちらかだけに心酔するのではなく双方の思いから学び，自身の生き方を考えられていることが読み取れる。

図６　見学を通して感じた疑問を聞く子ども

図７　吊り編み機で製造される製品に触れる子ども

これからの時代に求められる資質能力を育むために社会に開かれた教育課程がキーワードとして挙げられている。社会について学ぶ社会科では，従来から地域人材，地域資源の活用が重視されてきた。問題解決に向け，日々奮闘している人々の姿から学ぶことは，社会の仕組みや成り立ちに対する理解を深めるだけでなく，自分自身の生き方について問い直す機会にもなる。

２学期の終わりに子どもたちに今学期もっとも印象に残った学びを問うたところ28名中19名が社会科や総合的な学習での地域人材との出会いをあげた。このことが示すとおり，自分たちの身近な地域を教材化し，そこで活躍する人々との出会いの場を設定することで子どもたちの印象に強く残る学びを創造することができる。また，このような心が動く情動的な学びは，「もっと○○のことについて詳しく調べてみたい」といった思いを起こさせ，知識・技能の習得への原動力となると考える。

また，考えの違う他者との対話をとおして，批判的思考力を高めていくためには，そこで話し合われるテーマが切実性を伴ったものになっている必要がある。子どもたちが学習対象に対して，切実感をもつことができるよう自分たちにとって身近な地域を教材化する意義は大きいと考える。一方で，長瀬（2021）は地域社会の内容を教材化することで「学習者の主体性を育成できる」などの効果が期待できるとした上で，「地域教材を扱うことで，地域そのものを学ぶ郷土学習になる場合や社会科の学習内容とのつながりが不十分になってしまう危うさが潜んでいる。」[9] と述べている。

地域で出会う人々が魅力的な存在であればあるほど，子どもたちは地域人材の「ファン」になってしまうことがある。大切なことは，地域教材をとおして学習内容の目標に迫ることである。子どもたちのその子らしい学びを引き出しつつ，社会科としての学習内容の目標は達成されているかについても適切に評価し続ける必要がある。

3 考察

ここまで，本校が定義する批判的思考力（見方を変えて物事をとらえなおす力）を高めるために３つの「しかけ」（①座席表を用いた子ども理解②教科横断のカリキュラム・デザインの工夫③地域社会の教材化）と子どもたちの様子について記してきた。ここからは，これら３つの「しかけ」が全体での対話の場でいかに批判的思考力の育成に有意味であったかを考察していく。本時は，今後も吊り編み機を使い続けるWさんの決断について，クラス全体で話し合いを進めた場面である。単元をとおした座席表への書き込みから，「Wさんの決断は正しいか？」という学習問題に対して「①Wさんはここまで信念をもって吊り編み機を使い続けてきたから今後も使い続けていくべき（人の思いの視点）②吊り編み機は今や世界に認められる技術になっている。これからも使い続けていくべき（技術力の視点）③シンカー編み機を導入しても大量生産では大企業には勝てないから吊り編み機を使い続けていくべき（企業戦略の視点）④吊り編み機の使い方を習得するためには 10 年かかる。後継者不足の中，これだけの年数は待てない。比較的，使い方が簡単なシンカー編み機も導入すべき（後継者の視点）⑤シンカー編み機は大量生産ができる。大量生産は値段の安さにつながる。安いものを求める人のためにもシンカー編み機を導入すべき（消費者の視点）⑥安いものが大量に生産されることで，地球環境が悪化している（環境の視点））」といった意見が出されることが予想された。以下に実際の授業記録を示す。

授業者）それでは，この前からの続き「吊り編み機を使い続けるWさんの決断は正しいと言えるのか？」話し合いましょう。
児童①）絶対に正しい。だって吊り編み機って世界に注目されてきてるんやで！それってすごいことやろ？
児童②）確かにすごいかもしれんけど。それでお金もうかる？大量生産された安い服を着たいと思ってる人がほとんどやろ！
児童③）でも，前から言うてくれてるみたいに，いまさらシンカー編み機を入れても大企業には絶対勝てんやろ？やっぱり吊り編み機を使い続けるべきやと思う。それに外国がくるぐらいのすごい技術やったら大企業とのコラボとかもあるかもやし！
授業者）○○さん（児童名）はどやろ？
児童④）みんなとちょっと違うんやけど、、、。この前○○さん（児童名）が，服がたくさん捨てられてるって言ってくれたやん？安いものをたくさん買うっていう考え方も変えていくことも大切だと思う。
児童⑤）道徳でも○○（商品名）らほんまにほしってなったしなー。確かにあんまり着てない服もいっぱいある。（つぶやき）
児童②）たしかに，環境も大事よ。でもみんな服買うときにほんまにそんなこと考えてる？絶対値段で買うんよ！ぼくは絶対安い方買う。そんであまったお金でシュークリーム買う！
児童⑥）ぼくも○○さん（児童②）と同じで前まで絶対，安い方買おうと思ってたんよ！それで余ったお金で他にもゲームとか買いたし。でもお母さんに聞いたら，Wさんの服にするって！いいものを長く着たいって言ってた。（数名から共感の声）
児童③）これって人それぞれに考えあるんじゃないん？作る人も買う人もいろんなこと思ってるんやでー。
授業者）○○さん（児童③）が言いたいことってどういうこと？
児童⑦）私らずっとWさんについて話してきたやん？決断が正しいとか。でも，考え方って人それぞれでこれが絶対正解とかってないってことやと思う。

本時では，授業者が事前に想定していた「人の思い視点」や「後継者の視点」についての意見は出されていない。しかし，座席表をもとに子どもたちの「その子らしい思い」を把握しておくことで子どもたちの思考の流れにそった授業コーディネートができたと考える。また，「道徳でも○○（商品名）らほんまにほしいてなったしなー。確かにあんまり着てない服もいっぱいあるわー。」という児童⑤のつぶやきからは，他教科での学びが「値段」という視点だけでなく，持続可能な産業の在り方へと考え方を広げていく根拠となっていることが伺える。学習対象に対して，さまざまな教科の見方，考え方をとおして学ぶことで多様な視点からの考察が可能になる。多角的な思考が求められる社会科では，カリキュラム・デザインの工夫をとおして，子どもたちの考え方を広げる授業デザインが今後さらに重要になってくると考える。さらに，児童⑦の「私らずっとWさんについて話してきたやん？決断が正しいとか。でも，考え方って人それぞれでこれが絶対正解とかってないってことやと思う。」という意見からは，それぞれの思いをもった大企業や中小企業が自身の生活をより便利にしていることを実感していることが見受けられる。ともするとその役割が見えにくい中小企業を地域教材として取り扱うことで，子どもたちは批判的思考力を働かせながら学習に取り組み，工業に対する見方を変えて物事をとらえなおすことができたと考える。

4　成果と課題

今日の授業で自分の考えが変わりました。はじめは，安い服じゃないと売れないと思っていたけど，○○さん（児童④）の「これからの時代は，環境のことも考える」みたいな意見を聞いてすごく納得しました。また，授業では発表してなかったけど，○○さんはこの前いっしょにメディアルームで調べたとき，「少子高齢化で人へってるのにいっぱい作ってもだめなんじゃない」と言っていました。そのときは何も思わなかったけど，今日の授業で自分の考えが変わったのでまた○○さんに聞いてみたいです。～中略～　私は今まで自分がこうだと思ったことは，変えない方がいいと思っていました。でも，いつも話し合いのときはいろんな意見が出るからその考え方も変わってきて，これからは自分の意見とちがうと思う意見もいきなりちがうって思わないで，「そういう考え方もあるかもー」と思って聞きたいです。

これは，「Wさんの決断は正しいか？」の話し合いにおけるＬ児の振り返りである。Ｌ児は，自分の思いを強くもつ子どもである。そのため，考え方の違う他者と折り合いをつけるまで時間がかかり，新しい環境になかなかなじめないという課題を抱えていた。しかし，多様な考えに出合う対話を繰り返し経験することで，他者の意見を肯定的に捉えようとする意識が芽生え始めている。批判的思考力（見方を変えて物事をとらえなおす力）を発揮することで，社会的事象だけでなく，自身の生き方についても振り返ることができる子どもがいることは大きな成果であると言える。

ただ，Ｌ児の振り返りにもあるように「授業では発表してなかった」子どももクラスの問題解決に影響を与えるような「その子らしい考え」をもっている。そのような子どもたちにいかにして自分らしい考えを伝える環境を設定していけるかが今後の課題であると言える。このことに関して藤井（2010）は「切実な追究を生み出すような問題の発見や，問題の解決へと導く新しいアイディアの発見は，思考とコミュニケーションの自由が保障され，多様な気づきが提起され，それについて温かく議論が交わされる中から生まれてくる。したがって教師の役割は，学習活動の段階的なパターンを設定し，それに従って子どもたちの思考を統制することではなく，コミュニケーション豊かな温かい仲間関係を子どもたちの間に構築し，協同的な学びが成立するための関係性を学級に構築すること」[10]と述べている。子どもたちが自分らしい考えを伝えるためには，「コミュニケーション豊かな温かい仲間関係」を構築していく必要があるだろう。まずは教師自身が率先して，一人一人を大切にした「温かいかかわり」に継続して取り組むようにしたい。

社会科で学習する社会的事象はさまざまな側面から考えを深めることができる特性をもつ。これは，社会科がその子なりのアプローチを認め，それを全体の学びに活かすことができる教科であることを意味する。情報機器の普及に伴い，ともすると自分にとって都合の良い情報だけをもとに考えをつくり出してしまう危険性が高まっている現代社会では，多様な考え方に触れ，お互いの意見を調整しながら自分の考えを広げたり，新しい解を導き出したりする力が求められている。

本実践での学びをとおして，自分の意見が絶対であるということの危うさに気付き，違う考えを受け入れることの必要性を実感することができたＬ児のように，一人でも多くの子どもたちが考えの違う他者との対話の必要性に気付けるようにしたい。ただ，子どもたちにとって必然性のある対話は，短時間で生まれてくるものではない。一人一人がその学習を通して，何を思い，何を感じたかを丁寧に見取り，個の意見と個の意見をつなぐ授業設計を行っていく必要がある。どれだけ時間をかけても完璧に子どもたちの思いや願いに迫ることはできないが，今後も子どもたちの学びに寄り添うことを大切にし続けたい。

引用文献

(1) 唐木清志(2016)『「公民的資質」とは何か―社会科の過去・現在・未来を探る―』東洋館出版社
(2) デイビッド・エプスタイン（2020）『RANGE〈レンジ知識の「幅」が最強の武器になる』日経BP
(3) 長岡文雄（1985）『若い社会科の先生に』黎明書房
(4) 長岡文雄（1985），前掲
(5) 星野恵美子（1995）『カルテ・座席表で子どもが見えてくる』
(6) 奈須正裕（2021）『「少ない時数で豊かに学ぶ」授業のつくり方』ぎょうせい
(7) 水戸貴志（1989）『地域の教材はなぜ効果的か』聡明書房
(8) 藤井千春（2010）『子どもが蘇る問題解決学習の授業原理』明治図書
(9) 長瀬拓也（2021）『社会科でまちを育てる』東洋館出版社
(10) 藤井千春（2010），前掲

参考文献

(1) 工藤勇一，苫野一徳（2022）『子どもたちに民主主義を教えよう』あさま社
(2) 長瀬拓也（2022）『長岡文雄と授業づくり―子どもから学び続けるために―』黎明書房
(3) 奈須正裕（2017）『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベイスの授業づくりガイドブック―資質・能力を育成する15の実践プラン―』明治図書